

学位論文

要介護高齢者における口蓋の膜状物質の形成要因

川瀬 ゆか

医療法人尾張健友会 千秋病院 歯科部長
(主指導教員:小笠原 正 教授)

松本歯科大学大学院歯学独立研究科博士(歯学)学位申請論文

Factors affecting the formation of membranous substances in
the palates of elderly persons requiring nursing care

Yuka Kawase

Department of Dentistry, Chiaki Hospital, Medical Corporation
(Chief Academic Advisor : Professor Tadashi Ogasawara)

The thesis submitted to the Graduate School of Oral Medicine,
Matsumoto Dental University, for the degree Ph.D. (in Dentistry)

要介護高齢者の口腔内に膜状物質を見ることがあるが、その形成要因は明らかにされていない。本研究は、要介護高齢者を対象から採取された膜状物質を鏡眼的に観察し、上皮成分の有無を確認し、上皮成分を有する膜状物質の形成要因について検討した。対象は、2007年4月に愛知県内のC病院入院中の患者のうち65歳以上の要介護高齢者70名(81.1±7.7歳)であった。調査対象者全員が寝たきりで、1日2回の介助磨きが実施されていた。入院記録から年齢、疾患、常用薬、寝たきり度、意識レベル、意思疎通の有無、発語の可否、介助磨きの頻度を調査するとともにGingival Index, 開口状態の有無、舌苔(小島の分類)、舌背部と舌下部の粘膜保湿度を評価した。口腔内に観察された膜状物質は、歯科医師がピンセットで可及的に除去し、採取した。膜状物質は、重層扁平上皮由来の角質変性物が確認できたものを上皮成分のある膜状物質と判断し、その形成要因を決定木分析とロジスティック回帰分析により検討した。

70名中16名の調査対象者の口蓋から膜状物質が採取され、重層扁平上皮由来の角質変性物として確認された。膜状物質の形成に最も優先され、最も関連のある要因は「経口・経管」であり、経口摂取者には膜状物質がみられなかった。次に関連性が高かった要因は、「舌背乾燥(オッズ比:32.3)」であった。舌下粘膜の保湿度と関連がなかったため、唾液分泌量に依存しない口腔粘膜の乾燥であることを示唆していた。「開口(オッズ比;25.8)」は、口蓋粘膜が外気にさらされ、乾燥していることにより膜状物質の形成要因ということが考えられた。この3つの要因は、口腔機能が失われている要介護高齢者に関連するものであり、口腔粘膜の乾燥が原因であることが示唆された。